

令和 5 年 6 月 16 日現在

機関番号：23901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2018～2022

課題番号：18K00619

研究課題名(和文) 注釈的表現についての品詞論的および物語論的研究

研究課題名(英文) An investigation into annotation expressions focusing on word classification and narratology

研究代表者

福沢 将樹 (HUKUZAWA, Masaki)

愛知県立大学・日本文化学部・教授

研究者番号：30336664

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：注釈的表現として日本古代文学における「草子地」を取り上げた。また話し手/書き手と聞き手/読み手について物語論及び社会学における概念を検討した。また、学術論文におけるメタ言語表現としての「予告表現」に着目した。そこでは著者の認知的スタンスが反映されていることがわかった。更に、談話文法、つまり文章・談話における品詞論について素描した。そこでは特に、人が初対面の相手とどのようにコミュニケーションを始めるか、どのようなストラテジーを用いるか、という問いがある。ここでは狂言台本を用いて、まだ談話の場が形成されていない段階の場面を抽出して検討した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

コミュニケーションの重要性は、昨今言うまでもない。しかしそもそもの問題として、互いが必ずしもコミュニケーションを行う者同士として自己認識していない段階から談話は開始されなくてはならないところに着目した。つまり場が形成されていない段階から、何かのきっかけによって、例えば呼びかけたり姿を見せたり、偶然に接触や感知をしてしまったりといったきっかけが必要である。本研究は具体的には言語研究として行われたものであるが、社会学・人類学や、ひいては人間以外の動植物やロボットなど非人間と人間との間のコミュニケーション研究へと波及するものであると考える。

研究成果の概要(英文)：I have researched on annotation expressions or comments concerning sousi-ji (sousi-ji, author's intrusion in Japanese ancient novel). And investigated the role of speaker/writers and hearer/readers in the fields of narratology and sociology. Furthermore, I have specifically focused on some meta-linguistic expressions that announce the author's plans in advance in academic papers. It has been observed that these expressions reflect the cognitive modes of the authors.

Moreover, the study includes an outline of discourse grammar, which involves the classification of 'words' in discourse similar to parts of speech, providing a general overview. The key aspect of this study revolves around the question of how humans initiate communication and utilize strategies during their first encounters. To explore this, I have used the Kyogen scenario, a traditional Japanese comedy, and have selected situations where 'the communicational field is not yet constructed'.

研究分野：国語学

キーワード：談話分析 品詞 注釈 物語論 文章論 話し手 語り手 聞き手

1. 研究開始当初の背景

「注釈的表現」というメタ言語表現は、談話研究や文法論、物語論など学際的な様々な分野に跨るテーマであると思われたが、必ずしも広く見渡された研究が多くあるわけではないと思われた。文法論においては「センテンス(文)」が単位となっているが、これは文章・談話研究や文学研究など他分野との連携や波及を考えた場合、限界があると考えられた。文章・談話研究においては、従来接続詞や接続表現については多く研究が見られ、またメタ言語表現についても研究が見られるが、注釈的表現もまたセンテンス単位の位置づけではなく、文章・談話におけるセンテンスを越える単位の位置づけが必要であろうと思われた。とりわけ談話の開始・継続・終了に関する働きについては、物語論など言語研究以外の分野の知見が活かせると思われた。たとえば書簡文における頭語・結語や、あいさつ表現は文章・談話の開始・終了に関係するメタ言語表現であると位置づけられる。また『源氏物語』研究における「草子地」の中にもまた注釈などのメタ言語表現が含まれている。草子地研究には、意外なことに文法論における「誘導副詞」と似た側面があり、両者の関係を考察しておく必要があった。

2. 研究の目的

注釈的表現にまつわる「品詞論」上の位置づけを構想する。ここでいう「品詞論」とは、文法論(統語論)的な従来のものではなく、文章・談話論的な新たなものである。このような「談話文法」上の「品詞論」においては、内容的な中核部分には種々様々なものがありすぎ容易に定式化できない。例えば談話の展開とは、必ずしも序破急や起承転結といった定型通りに進むものではなく、容易に脱線したり、横やりが入ったり、オチがつかず尻切れのまま終わってしまうこともある。そこでメタ言語表現のような周辺的現象に着目することとなる。つまり中途に差し挟まれる「注釈」や、「開始・継続・終了」といった側面に注目することとなる。

このような注釈的表現や開始・継続・終了の表現に着目することは、言語学・日本語学における文法研究と文章・談話研究を横断するだけでなく、文学研究における物語論へも越境・橋渡しし、言語哲学におけるメタ言語研究とも相互連関が期待される。また、ゆくゆくは文章の作成・読解や話し合いの教育にも活かすことができるであろう。従来は接続表現や発話のターン・タイミングに多く注目が集まっていたところがあり、また定型的なあいさつ表現に関心がとどまっていたところがあるが、接続以前に注釈や開始・継続・終了を表す表現にも目を向けることによって、非定型的な臨時的表現や、非言語的表現にも注意を喚起することとなり、広く社会学や文化人類学におけるコミュニケーション研究への橋渡しも期待できる。

3. 研究の方法

定型的な「あいさつ」表現もまた、開始や終了にまつわる表現であるが、非定型的な言語的または非言語的な言動もまた、談話の開始・継続・終了に関係するメタ言語表現となりうる。とりわけ、話し手・聞き手が初対面で、いまだ互いがコミュニケーションの成員として自己認識しておらず、談話の場が形成されていない段階から、互いをコミュニケーションの相手として自己・他者認識し場を形成していく段階へと移行する場面に着目する。具体的には、狂言台本(大蔵流虎明本)を用いて、初対面から談話を開始する場面や途中で途絶した談話を再開する場面を抽出し、様々な登場人物同士の間で行われる言動に着目した。狂言などフィクション作品では、見知った相手の家へ訪問するような場面だけでなく、往来で不特定多数の相手に注意を引くような場面もあれば、閻魔や精霊などノンヒューマンな存在と出会う場面や、人間なのかただの物体なのかかわからないようなものと出会う場面など、普通の談話研究のように研究協力者に談話の場を設定するのは異なった多様な場面が存在する。そうした未だ談話の場が形成されていない段階において人は、或いはノンヒューマンは、どのようなストラテジーを用いて談話の場を形成していくのかということを経験的・ケーススタディの形で観察記述する。

また具体的な言語的および非言語的表現として「品詞論」という観点ではどのような品詞が設定されるかについて体系の構築を試みる。同じ「開始」や「終了」であっても、談話自体のそれと、個々の発話ターンのそれとでは、用いられる表現が異なる場合があり、談話機能として区別する必要がある。そして談話機能にはどれだけの種類が必要・十分であるのかという全体像を「品詞」体系として構想し構築する。

4. 研究成果

『源氏物語』研究において「草子地」と呼ばれるメタ言語表現がかつて大きく注目されてきたが、その「注釈的表現」としての側面について、文法論において「誘導の機能」と呼ばれたものと絡めて考察した。また「作者」と呼ばれた語り手と「読者」という概念には多層性があるという研究があったが、社会学においても speaker・hearer には複数の役割に分かれている研究があり、両者の橋渡しを試みた。

虎明本狂言台本を用いて、いまだ談話の成員が定まっていない段階から談話を開始する「談話開始詞」と、個々の発話ターンを開始するだけの「ターン開始詞」を区別するなど、「談話品詞

論」の構築に向けて必要な議論を、狂言の中の具体的な場面を抽出し論じた。そして「談話品詞論」の全体像を素描した。

学術論文の叙述の中で今後の論述の展開を予め読者に向け予告しておく 予告表現 というべきメタ言語表現がある。その中で「～ていく」という表現が用いられるところに着目し、テンス・アスペクト研究と絡めて論じた。 予告表現 もまた、読者を論述の場に連れて行って “道案内” する役割があると指摘し、それは論文著者の認知のスタンスを反映するものであろうと推測した。その認知スタンスは、別のタイプの論文叙述では過去形の使い方にも現れる。すなわち、前者では読者を目の前にプレゼンを行う実況中継のようなスタンスで叙述されているのに対し、後者では既に終了した研究活動を自己の “体験” として持ちその成果を客観的に報告するようなスタンスで叙述されているものと推測した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 福沢将樹	4. 巻 70
2. 論文標題 談話品詞論試論	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 愛知県立大学 説林	6. 最初と最後の頁 (1)-(17)
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004858	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福沢将樹	4. 巻 20
2. 論文標題 上演 を読む読者 玉上「三人の作者」「二種の読者」論を再考する	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 物語研究	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24523/mgkk.20.0_117	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福沢将樹	4. 巻 68
2. 論文標題 論文の 予告表現 に見られる「～ていく」試論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 説林	6. 最初と最後の頁 左1-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15088/00004258	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福沢将樹	4. 巻 (108)
2. 論文標題 草子地を再考する 注釈 という機能を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 表現研究	6. 最初と最後の頁 29-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 福沢将樹	4. 巻 22(2)
2. 論文標題 学術論文叙述のスタイル	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 日本語文法	6. 最初と最後の頁 137-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 福沢将樹
2. 発表標題 談話開始詞とターン開始詞 虎明本狂言を中心に
3. 学会等名 国語語彙史研究会 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福沢将樹
2. 発表標題 草子地を再考する 注釈 という機能の広がり
3. 学会等名 表現学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福沢将樹
2. 発表標題 読者 / 聞き手を再考する 玉上「三人の作者」「二種の読者」論から
3. 学会等名 物語研究会
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 青木博史 / 小柳智一 / 吉田永弘 (編)	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 290
3. 書名 日本語文法史研究4	

〔産業財産権〕

〔その他〕

福沢将樹 「コミュニケーションの場が一(いち)から作られるまで 自己の体験と狂言台本より 」コミュニケーションの民族誌、2023年(令和5年)1月30日
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------